

● テーマ ●

海を渡った日本の教育

—戦前期ブラジルにおける日本の教育文化の越境と再創—

Japanese-style Education in Brazil before World War II:
Transnational and Transcultural Practices

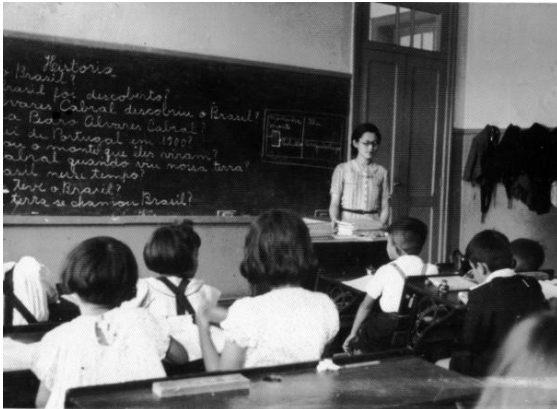


写真 1：大正小学校の授業風景（1940 年頃か）アリセ山田氏提供

● 発表者 ●

根川幸男

Sachio NEGAWA

ブラジル大学准教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, University of Brasília

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

根川幸男

Sachio NEGAWA

ブラジリア大学准教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, University of Brasília

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

平成 2 年 3 月：文学修士（同志社大学大学院）

平成 12 年 2 月：Master of Arts（サンパウロ大学大学院）

平成 14 年 6 月：ブラジリア大学外国語・翻訳学部准教授

平成 22 年 1 月：国際日本文化研究センター外国人研究員就任（平成 22 年 12 月迄）

著書・論文等

根川幸男（2009）「大和魂とブラジリダーデー—境界人としてのブラジル日系政治家と軍人—」森本豊富編著『移動する境界人—「移民」という生き方』現代史料出版 pp. 55-87

根川幸男（2009）「ブラジル近現代史の中の「日本文化」表象」『国際研究集会報告書第 32 集 日本文化研究の過去・現在・未来—新たな地平を開くために—』国際日本文化研究センター pp. 65-76

根川幸男（2008）「ブラジルにおけるエスニック日系新伝統行事の創出—七夕祭りの再創と展開を中心に—」『移民研究年報』14 号日本移民学会 pp.71-82

NEGAWA, Sachio（2009）“Tipologia e Característica das Instituições Educacionais Nikkeis no Brasil do Período Pré-Guerra”. In. *Anais do ENPULLCJ 2009*. São Paulo, FFLCH/USP, pp. 303-310.

NEGAWA, Sachio（2008）“Políticos e Militares Nikkeis Brasileiros”. In. *Cinqüentenário da Presença Nipo-Brasileira em Brasília*. Brasília, FEANBRA, pp. 307-328.

NEGAWA, Sachio（2007）“O Japão no Brasil”. In. *Humanidades* vol.54. Brasília, Ed. UnB, pp. 35-42.

海を渡った日本の教育

—戦前期ブラジルにおける日本の教育文化の越境と再創—

Japanese-style Education in Brazil before World War II: Transnational and Transcultural Practices

はじめに

二〇〇八年、ブラジルでは、日本人移民百周年を迎え、各地で数々の記念式典が開催されました。一般的に「成功」のイメージで語られるブラジルの日本人移民ですが、六月二日にサンパウロ市のサンボドロモ（毎年カーニヴァルのパレードが行われる会場）で行われた記念式典のパレードも、初期移民の苦労やホスト社会での差別、戦争といった多くの苦難とそれを乗り越えての「成功」という物語で構成されていきました。このような大規模な式典を開催し百周年を祝うことができたことは、確かに日本人移民がブラジルにおいて一定の「成功」をおさめたことの証に他ならないと言えるでしょう。

同時に、日系社会内でも、日系人や移民研究の研究者間でも、一九〇八年以来一世紀間の大きな総括が必要とされ、さまざまな議論がなされてきました。このようなブラジルで

の一定の「成功」を勝ち取った日本人移民ですが、その「成功」の一因は教育にあると言われています。

現在ブラジル日系社会の担い手は、日本生れの一世から二、三世に世代交代しておりませんが、いわゆる二世リーダーと呼ばれる人びと、特に戦前期に教育を受けた人びとは、正負両面において日本的な教育文化の影響を強く受けていると言われています。ブラジルではひと頃よく「ジャポネス・ガランチード」ということが言われました。つまり、「日本人・日系人は保証付きである」（信頼できる）という意味の言葉です。日本人・日系人は嘘をつかない、約束を守る、時間に遅れない、いい加減な仕事をしないというような肯定的な評価を表しています。最近の日本在住の日本人もブラジルの日系人も必ずしもそうとは言えないと思いますが、そのように評価された時期があったのです。ブラジル人が新しい引越先で、医者や歯医者さんを探すとき、電話帳でサトウやスズキやイノウエといった日系人の名前をもつクリニックを探すということを含んでもよく聞きますが、これも「ジャポネス・ガランチード」の一例でしょう。私はここ数年、ブラジル日系人の現職あるいは元連邦議員や高級軍人にインタビューしておりますが、彼らの中には、自分たちの「成功」について日本の教育を受けたことを大きな要因として語る人が多いのです。また、それを「修身」の授業を受けたおかげだとおっしゃる方も何人かいて、逆に「日本はなぜ修身教

育を復活させないのか」と私に尋ねる人もいました。

ブラジルには、サンパウロ大学という名門大学があり、入学するのも卒業するのも難しい大学ですが、一九七〇年代終わりの調査で、各学部の日系学生の平均が一五%であり、理工系の学部の場合、二〇%を超えと言われた時期がありました。「サンパウロ大学に入りたければ、予備校に行くより、日本人を一人殺せ」とまで言われました。私たち日本人や日系人には笑えないジョークであり、実際誰かが殺されたというお話も聞きませんが、日系人の教育熱心を表す極端なエピソードの一つだと思います。

このように、ブラジル社会に大きなプレゼンスをもつ日系人ですが、それは教育という局面においてより顕著な特徴や動きが見られるわけです。そこで、今日は、「海を渡った日本の教育」と題して、ブラジル日系子弟の教育についてお話ししたいと思います。

まず大きなテーマとして、「第二次世界大戦前のブラジルにおける日系教育機関（日本人学校や寄宿舎）を通じた日本の教育文化の越境と再創のプロセスとメカニズム、歴史的背景、現代への影響を明らかにする」というものがあり、これが私の当面の研究テーマです。今日の発表は、こういった大きなテーマにもとづいて、私がここ数年ブラジルと日本で実施した調査の成果としてわかってきたことについて報告いたします。

なぜこのテーマか？、今なぜブラジル日系移民教育研究なのか？ということですが、次

のような理由があります。

・ブラジルは、戦前に一八万八〇〇〇人、戦後に五万三六五七人という、世界でもっとも多く日本人移民を受け入れた国の一つであること。

・ブラジルは、日本帝国の非勢力圏でもっとも多く日系教育機関が存在したこと^①。

・それにもかかわらず、旧植民地やハワイ・米本土を対象とする研究に比べて、蓄積が寡少であること^②。

・移民子弟の教育の研究は、エスニック集団における文化継承や複数集団間での相互的な文化伝達および学習のプロセス、すなわち「文化化」を明らかにするのに有効であると考えられること。

・私自身がブラジルの日本語・日本文化教育の現場におり、このテーマに関する資料収集に携わってきたこと。

・現在、ブラジルで戦前期の日系教育を受けた人びと（いわゆる二世世代）がどんどん亡くなっており、史料も消滅しつつある。研究としては、資料の面から危機的状况にあること。

以上のような点から、研究状況だけでなく、資料収集や聞き取り調査の面からも、調査・研究が急がれるわけです。

ブラジルという国

ブラジルは土地が広く、第二次大戦前から戦後にかけて世界でもっとも多くの日本人移民を受け入れてきた国です。現在、ロシア、インド、中国とならんで BRICs と呼ばれる新興経済大国として位置づけられ、二〇一四年に FIFA ワールド・カップ、二〇一六年にはリオ・デ・ジャネイロ夏期オリンピックが開催されることになっていきます。世界的に注目されつつはありますが、まだまだ日本ではポピュラーな国とは言えません。ここでは、本題に入る前に、予備知

国名	ブラジル連邦共和国 (República Federativa do Brasil)
面積	8,547,403.5 平方キロメートル (日本の 22.6 倍)
人口	1 億 9,148 万人 (2009 年)
首都	ブラジリア 人口 261 万人 (2009 年)
元首	ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルバ (Luiz Inácio Lula da Silva) (2007 年 1 月 1 日就任、2 期目、任期 4 年)
言語	ポルトガル語、その他トゥピ・グアラニー語など
宗教	カトリック (74%)、プロテスタント (15%) (2000 年)
GDP	1 兆 5,740 億 3,382 万ドル (2009 年)
時差	日本時間 -12 時間 (サマータイム実施期間は -11 時間)

表 1 : ブラジルの一般情報

表 2：ブラジルにおける国別入移民数
(1819～1947)

国	入移民数 (人)
イタリア	1,513,151
ポルトガル	1,462,117
スペイン	598,802
ドイツ	253,846
日本	188,622
ロシア	123,724
オーストリア	94,453
シリア・レバノン	79,509
ポーランド	50,010
ルーマニア	39,350
イギリス	32,156
リトアニア	28,961
ユーゴスラビア	23,053
スイス	18,031
フランス	12,103
ハンガリー	7,461
ベルギー	7,335
スウェーデン	6,315
チェコ	5,640
その他	347,354
合計	4,903,991

出所：ブラジル日本商工会議所編 (2005)
『現代ブラジル辞典』 p. 222 から転載

識として少しブラジルについて触れたいと思います。表 1「ブラジルの一般情報」に示したように、国土は日本の約二三倍の面積を持ち、天然資源が豊富で、一九世紀から多くの移民を受け入れてきました。そのおかげか人口は二億人近く、人的資源にも恵まれています。

表 2「ブラジルにおける国別入移民数」に示したように、移民送出国としては、イタリアが最も多く、一九世紀から一九四七年までに一五〇万人を越える移民が入国しています。

次いで旧宗主国ポルトガル、スペイン、ドイツ、そして日本と続きます。これを見ると、一九四七年以前、すでに約五〇〇万人の移民を受け入れていたことが確認でき、ブラジルはまさに「移民の国」ということができます。

本日の発表では、先ほどの関心のもとに、次のような四つのトピックに分けてお話ししたいと思います。

1. ブラジル日系教育の歴史
2. ブラジル日系教育機関の分類とそれぞれの性格（どのような学校があったのか？）
3. ブラジル日系教育機関の教育活動（どのような教育を行っていたのか？）
4. まとめにかえて（この研究にどのような意味があるのか？）

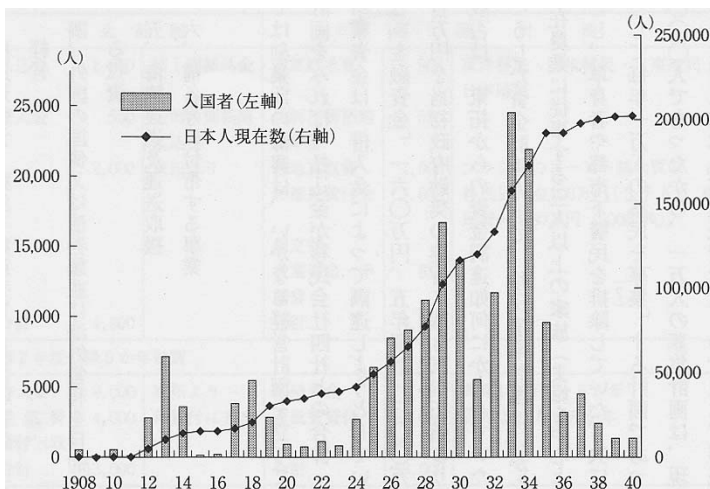
1. ブラジル日系教育の歴史

では、まず、ブラジル日系教育の歴史について、概略を説明しておきたいと思います。お手元の「ブラジル日系教育史略年表」を参考にしてください（本編では、巻末に掲載）。

先ほど申しましたように、日本からブラジルへの公的な第一回の移民は、一九〇八年六月一八日にサントス港に入港した七九三人のいわゆる笠戸丸移民です^③。当時のブラジル

グラフ 1：ブラジル日本人移民数の推移

(黒瀬郁二 (2003) 『東洋拓殖会社』 日本経済評論社より転載)

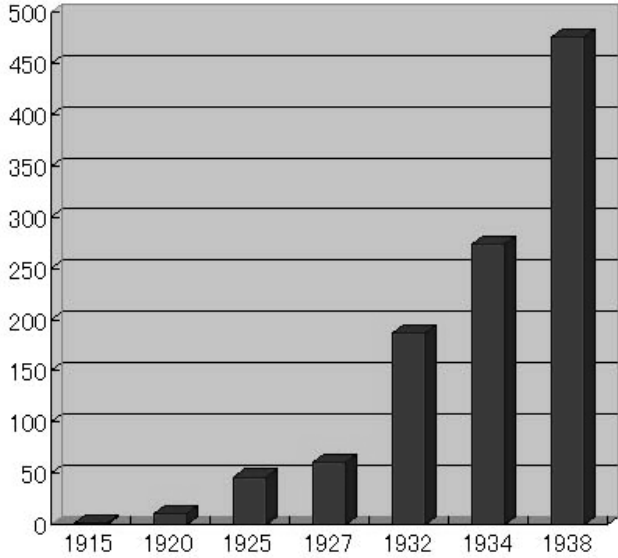


の日本移民受け入れは、基本的に農業移民であり、家族移民が前提でした。したがって、この時に赤ん坊だった移民、入国直後に生れた赤ん坊は、六、七年後の一九一五年頃に学齢期に達するわけです。偶然かどうかわかりませんが、一九一五（大正四）年、サンパウロ市中心部のコンデ・デ・サルゼーダス通りという急坂のふもとに大正小学校が創立されています。この大正小学校は、ブラジル最初の日系教育機関といわれています^④。

グラフ1を見てわかるように、一九二〇年代中頃から三〇年代前半にかけて日本からのブラジルへの移民は最盛期を迎え、戦前移民の六五%がこの時期、一九二四年から三〇年代末にブラジルに渡航します。

大正小学校の後、一九一六年には桂小学校（サンパウロ州イグアペ郡）、一九一七年にはノーバ・エスペランサ小学校（サンパウロ市郊外コチア）、旭小学校（同州平野植民地）、アグア・リンパ小学校（同州アラサトゥバ）など一部の農村地帯の日系小学校も開校しています（サンパウロ人文科学研究所編、一九九六、三八・四〇頁）。ただ、一九一八年のサンパウロ州北西地方（後に日本人移民の集住地帯となる）調査によると、日本語教育は皆無に近く、ポルトガル語教育でさえ大耕地をのぞく他はほとんど行われていなかったという報告があります^⑤。内陸農村地帯の日系教育機関は、二〇年代に入ってからサンパウロ州の開拓前線が進むにつれてその数が徐々に増加していくこととなります。グラフ2は「ブラジルの日系教育機関数の推移」ですが、これを見ていただいてもわかるように、一九二〇年代後半から、急激に日系教育機関数が増えていきます。先ほどお話ししたように、ブラジル移民は家族移民が条件だったので、当然、学齢期の子どもの数も増え、学校数も増加の一途をたどります。この時期になると、日系移民も子弟教育にお金をつかう経済力をつけてくるということも、この学校数増加の条件となります。一九二七年には、サンパウロの日本総領事館のお声がかかりで、在伯日本人教育会という連絡組織が発足します。一九二九年八月には、これを引き継ぐ形で、在サンパウロ日本人学校父兄会に発展します。この組織はブラジルの社団法人として登録され、各地でばらばらに教育を行っていた日系

グラフ 2：ブラジルの日系教育機関数の推移
 (青柳編 (1953)、伯刺西爾時報編 (1933)、同 (1938)、
 サンパウロ日本人学校父兄会 (1934) などから作成)



教育機関の統制をはかり、日本政府からの補助の窓口となりました。一九三二年四月の統計では、「日本人小学校」は未公認のものも含めると一八五校にのぼり、教師数は日本語二一人、ポルトガル語一四一人を数えるほどになりました(日本移民 80 年史編纂委員会、一九九一、一一八頁)。

このように、順調に発展していくかに見えたブラジルの

日系教育ですが、三〇年代になるとさまざまな問題が顕在化します。日本ではこの時期は、世界大恐慌や満州事変を経て、軍部が台頭し、ナシヨナリズムがさかんになります。ブラジルではジェツリオ・ヴァルガス大統領のもと、ナシヨナリゼーション運動が高揚します。

このナショナルリゼーションはさまざまな形でブラジル社会を変容させますが、移民たちにとっては同化の促進・強制という形で現れます。たとえば、日本人移民にとってもっとも大きな影響としては、一九三四年の憲法によって、外国移民二分制限法が制定され、一年に入国できる移民数が制限されたことです。これは過去五〇年間にブラジルに定着した当該国人の総数に対し、毎年その一〇〇分の二(二%)の限度を超えることができないことを定めた法律です。この比率だと、日本移民の入国定数は毎年二五〇〇人程度になってしまいます。この当時、移民送出国のイタリアやドイツからブラジルへの移民数が激減しているのに対して、一九三三年には日本移民が約二万五〇〇〇人を数え、これが全外国人移民数の半分以上を超えることを考えると、日本移民を狙い撃ちにした一種の排日移民法であったことが理解されます。

一九三七年には、新国家体制(エスタード・ノーヴォ)と呼ばれるヴァルガス大統領の独裁体制が確立しました。これは「その内容は、革命による独裁体制の確立によって国家の統一を推し進め、表面上は民衆の政治参加を強調し、国民共通の意識としての『ブラジリダデ』すなわちブラジルの民族中心の政策を行うことであつた」とされています(住田、二〇〇〇、一二七〜一二八頁)。州ごとの独立性の強かった、また外国からの移民とその子孫たちが独自の言語や文化、特有のコミュニティを維持していた状況を強力な独裁体

制の下にブラジルという国民国家に統一するという政策でした。この体制の移民政策については、ナショナリズムの高揚が進められる中で、移民の同化政策が実施され、移民のブラジル化ということが推し進められることになりました。

こうした中で日本人移民やその子弟教育というものが、ブラジル当局にどう映っていたのでしょうか。

例えば、日本の外務省外交史料館に所蔵された資料の中に「学校関係雑件」として、次のような記事があります。「通公第一一三号」という通し番号がついているのですが、一九一七（大正六）年一月五日に、当時のブラジル臨時代理公使野田良治から外務大臣本野一郎宛に送られた公電の写しです。

通公第一一三号

在伯 臨時代理公使 野田良治

外務大臣法学博士子爵本野一郎殿

日本学校開設に関する質問書伯国下院に提出セラレタル件

伯国聯邦下院議員中新聞紙上に何等かの目新しき記事の掲載せられたるを発見する

毎に其の事件の大小軽重に論なく且当該記事の真偽如何を問はず直ちに政府に対し質問書提出の奇癖を有する為、頗る著名となれる「リオデジャネイロ」州選出の一青年議員「マウリシオ・デ・ラセルダ」(Maurecio de Lacerda)氏より客月二九日を以て日本学校開設に関する一の質問書を下院に提出せり。

右質問書提出の動機は其の前日本汽船「タコマ」丸入港し当日の夕刊新聞 *A Noticia* が同港入港に関する記事中に同船にて日本教師数名渡伯せる旨を報道したるにありて同氏質問の要旨は「サンパウロ」州日本人植民地(複数を用ひたり)における日本学校開設を防止する為め如何なる処置を執りたるかに関し政府の報告を求む」といふにあり(以下略)(外務省記録「学校関係雑件」第七卷)^⑥。

この記事から、ブラジルにおける「日本人の不同化」の原因が日本人学校にあると考えられていたこと、それをにがにがしく思っていた当局者がいたことがわかります^⑦。

では、ブラジルの日系教育はどのような日系子弟(二世)を生み出していたのでしょうか。日系教育は、日本語教育ではなく、「日本人」をつくるための教育だったとされます(前山、二〇〇一、五五頁)。これは、次のような資料が参考になるでしょう。

日本のお友達へ

ブラジル国パウリスタ線東京植民地小学校五年 長場謙爾

今日先生から二千六百年祭のお話をききました。僕はブラジルで生まれましたが日本人であることを大へんありがたいと思ひました。

ブラジルは今ちようど夏です。大そう暑う御座います。今はどちらを見ても鳥はみんな植付してあります。もう早蒔の芽が出て青々として居ます。僕達の住んでゐる所はサンパウロ州パウリスタ線、モツカ驛から三籽ばかり離れた植民地です。名は東京植民地といひます。(中略)

朝八時から晝までブラジル語を習つて晝から日本語を習つてゐます。日本語は主に修身、算術、讀本を習つてゐます。先生やお父さん達から日本のお話をきく度に僕も一度日本へ行つてみたいと思ひます。そうして日本の美しい景色や櫻を見て富士山へも登つてみたいと思ひます。僕はまだ新聞がよく讀めませんが先生や日本の兵隊さんの強いことを聞く度に僕も兵隊さんに負けぬやうに一生懸命勉強してお國の爲につくしたいと思つて居ます(日本力行会編、一九四〇、一八二頁)。

これは、皇紀二六〇〇年(一九四〇)を記念して日本力行会によって編纂された海外日系

小学生の作品集に収録されたもので、書いたのはブラジル生れの日系小学生です。この作文には、皇紀二六〇〇年というナショナリズム発揚の機会をとらえた書き手の気張りや教師の指導があつたと想像され、またそのような傾向の強い作品が選択されたとも考えられるため、こうした点を差し引いて考えることが必要ですが、「日本の兵隊さんの強いことを聞く度に僕も兵隊さんに負けぬやうに一生懸命勉強してお國の爲につくしたいと思つて居ます」などという記述に、遠隔地ナショナリズムの一端をうかがうことができる内容となつています。地球の反対側にあるブラジルで、立派な「小国民」が育成されていたわけですから。先ほど紹介したサンパウロ市の大正小学校でも、「皇紀二千六百年奉祝曲」が踊りとともに練習されていたそうです。ただ、この作文の中には、ブラジルの国土の広さや自然の雄大さを誇らしげに書く姿勢も見られ、必ずしも日本一辺倒なとらえ方がされていなくつたことも見逃してはならないでしょう。この時期の二世の子どもたちは、ブラジルと日本という二つの国のナショナリズムのはざままでたいへん苦悩した世代です。そうした苦悩や矛盾、相克をかかえながら、日本人移民とその子どもたちは戦争の時代へ突入していくこととなります。

2. ブラジル日系教育機関の分類とそれぞれの性格

次に、ブラジルの日系教育機関という場合、どのような学校があったのか？ 実にさまざまな形態の学校があったことがわかります。戦前期の日系諸教育機関は、次のように分類できると思います (NEGAWA, 2009, p. 305)。

- ① 小学校
- ② 中学校
- ③ 農業学校・実業学校（専門学校）
- ④ 私塾
- ⑤ 女学校
- ⑥ 寄宿舎・ペンソン（下宿屋）
- ⑦ 洋上小学校

ここではすべての教育機関についてお話している時間的余裕がありませんので、日系小学校を中心にお話ししたいと思います。一九三〇年代末にブラジルに五〇〇〜六〇〇校あったという日系教育機関の大部分が、いわゆる小学校です。一口に小学校といっても、

丸太小屋のような校舎に就学期間が三〜四年の農村小学校から、日本のカリキュラムに準じて尋常科六年だけでなく高等科や補習科をそなえた小学校まで、さまざまなタイプがありました。

写真2をご覧ください。

農村地帯に最初の頃建てられた小学校というのは、大概このような丸太小屋で、先生に来てもらうのも一苦労だったといえます。ちなみに、この写真は、サンパウロ州の隣のパラナ州ロンドリーナに一九三三年に設立されたロンドリーナ中央区小学校の開校式です。晴れの日で子どもたちは靴を履いています。が、ふだんは裸足で走り回っていたそうです。最後列は佐藤先生夫妻で、奥の丸太小屋は先生夫婦の教員住宅だそうです。内陸部の農村地帯では、家を建ててやりでもしないと、なかなか先生には来てもらえなかったということです。

次に都市部の小学校についてお話しします。先ほども述べたように、ブラジル日系最古の小学校は、一九一五年一〇月にサンパウロ市のコンデ・デ・サルゼーダス通りに創設さ



写真2：ロンドリーナ中央区小学校（1933）
沼田信一氏提供

れた大正小学校です。最初は教師一人、生徒三人の小規模な寺子屋方式でしたが、次第に発展し、一九二八年一〇月、父兄会の協力と総領事館の全面的支援により、現在ブラジル日本文化協会ビルのあるサン・ジョアキン通りの新校舎に移転しました。新たに購入した新校舎は、一階に八教室、職員室、二階には教育父兄会の寄宿舎を備えていました。写真3は一九三九年の同小学校高等科の卒業前の記念写真ですが、背景には立派な新校舎が写っています。一九三二年からは、日本の外務省を通じて、日本の師範学校を卒業した複数の教師が派遣されるようになり、三〇年代には教師十数人、生徒約三〇〇人を数えるブラジル日系教育のモデル校的機関となっていきました。また、天長節をはじめとする四大節など日系社会の主要行事も、この小学校で領事館員の立会いのもとに執り行なわれるようになり、「コロニア一の学校」と呼ばれるようになりました。

この大正小学校の後、桂小学校やノバ・エスペランサ小学校など、サンパウロ



写真3：大正小学校と高等科の生徒たち
(1939) ジェニー脇坂氏提供

州各地に多くの日系小学校が開校していくのは先ほどお話しした通りです。

次に②の中学校ですが、まだ調査中で、詳しいことはわかっていません。一九三〇年代末において、三つの日系中等教育機関が存在したことが確認できます。すなわち、プレジデント・プルデンテ商業学校、プレジデント・プルデンテ中学校 (Ginágio São Paulo) (バストス中学校の三つ (それぞれ一九三九年創立) です (青柳編、一九五三、二〇一〜二〇二頁)。これらについては、私自身詳しい資料を見たことがなく、今後の調査・研究に俟たなければなりません。

③の農業学校・実業学校は、いわゆる実業専門学校ですが、いくつかのユニークな例が見られます。たとえば、暁星学園というサンパウロ市ピネイロス地区にあった日系実業学校がありました。岸本昂一 (一八九八〜一九七七) という新潟県出身のプロテスタント教師によって設立された学校ですが、初等教育部門の他に、勤労部という部門がありました。農村出身の貧しい少年少女たちを寄宿舎に収容し、同校付属のクリーニング工場で働かせたりしながら授業を受けさせ、夜学へ通わせたりするコースでした (写真4)。また、エメボイ実習農場という日本で中等教育を受けた少年たちを受け入れ、農業の実地教育を授けながら、ブラジル農業の将来的なリーダーを育成する農業専門教育機関もありました。

写真4：暁星学園付属のクリーニング工場
(年代不明) イサク岸本氏提供



トガル語、日系子弟に日本語を教えるクラスや日曜学校の他、柔道場、剣道場があったことが知られ、野球や相撲なども奨励されました。特に、小林美登利が剣道家であったこともあり、同塾はブラジルで最初に剣道場を開いた場所となりました。また同塾は、『聖州義塾々報』という一種の総合雑誌を一九三〇年から毎年発行し、移民の啓蒙活動に努めました。キリスト教主義にもとづき、「大和魂をそなえたよきブラジル市民」の育成をめざしますが、戦時中の一九四二年に当局の命令で閉塾に追いこまれてしまいます。写真5の前列

④の私塾については小規模な学校が多く、記録が少ないので、わからないことが多いのですが、先ほどの大正小学校も、もとは教師一人、生徒三人の私塾として出発しました。その中で例外的に多くの記録が残されているのが聖州義塾です。この義塾は、同志社大学出身のプロテスタント牧師小林美登利（一八九一〜一九六一）によって、一九二五年サンパウロ市に創設された私塾・教会・寄宿舎が一体となった教育機関です。新来移民にボル

写真 5：聖州義塾と小林美登利（1937）
前列右から三人目小林、小林眞登氏提供



右から三人目が塾長の小林美登利です。

⑤の女学校もユニークな例です。ブラジルでは一九三〇年代に出現します。これは女子教育の専門家の方にご教示いただいたのですが、カナダや米国本土には、日系の女子中等教育機関は発達しなかったといえます。この意味で、ブラジルにおいて特徴的な日系教育機関と言えるでしょう。「花嫁学校」とも呼ばれ、ここで日本語と日本式礼儀作法をしつけられた女性たちは、日系リーダーやVIPたちの花嫁予備軍的な位置づけでした。それだけでなく、たいへん高水準の教育が行われていたようです。例えば、サンパウロ女学院は、赤間みちへ（一九〇三～二〇〇五）とその夫赤間重次によって、

一九三〇年四月に開設された「裁縫教授所」を前身とします。一九三五年には、日本語小学部・検定準備科・実科高等女学部を次々と設置しました。中でも実科高等女学部の設置には、「時代の要求に応じて（中略）単に裁縫技術の教授だけでなく、将来社会の教育界にその一端をになえる指導者の養成を期し、在伯邦人社会に於ける女子中等教育事業に先鞭をつけた」（佐藤、一九八五、七二頁）と、日系女子教育史における画期として指摘されています。また、この年の四月には校誌『學友』（第三号から『學友会誌やまと』に改称）が創刊されています。一九三七年には、ポルトガル部を新設し、ブラジル私立学校令にもとづく私立学校として公認され、ポルトガル語名を「エスコラ・パルティクラル・アカマ・サンパウロ」とし、日本語名を「サンパウロ女学院」に改称、付属寄宿舎大和女学寮を有し、一九三八年の時点で、在校生七〇名であったことが確認できます。このサンパウロ女学院の他にも、同じリベルダーデ地区のガルヴォン・ブエノ通りに日伯実科女学校（一九三二年創立）があり、人気を二分していました。紆余曲折はあったものの、両女学校は、ブラジルの学校法人として大戦を生きのびました。特に、サンパウロ女学院は、戦後、ピオネロ学園として総合学園化し、現在は幼稚園・小学校から高校まで八〇〇余名の生徒を有するサンパウロ市の有力私立学校として存続しています。

⑥の寄宿舎・ペンソン（下宿屋）も一種の教育機関と見ることが出来ます。学校付属の

写真 6：サンパウロ女学院と教師・生徒たち（1930 年代後半）
アントニオ赤間氏提供



ものだけではなく、単一運営の寄宿舎も多くあつたようです。現在世界最大の日系エスニックタウンとして知られるサンパウロ東洋街があるサンパウロ市のリベルダーデ地区は、かつて日系ペンソンの街として知られていました。内陸部からサンパウロに出てきた移民子弟は、このエリアのペンソンや学校付属の寄宿舎で共同生活をし、学校に通っただけでなく、時には寄宿舎・ペンソンの中で日本語の読み書き、しつけを習う事もありました。

最後に、これはブラジルの日系教育機関とは言えないかもしれませんが、移民船内で洋上小学校ともいえるべきものが開かれていました^⑧。ブラジル移

民は基本的に家族移民であったため、多くの子ども移民（ブラジルで労働力とみなされたのは一二歳以上）が含まれていました。また、ブラジルへの航海は、第一回の笠戸丸で五日二日間、インド洋からアフリカ喜望峰回りの南米東岸航路だと約二ヶ月の期間を洋上で過ごしたわけです。この長い航海の期間を利用して、移民船内で開かれたのが洋上小学校です。これらの小学校は、船長や輸送監督が校長、事務長が教頭、船客の中から教師経験者や高学歴者を見つけて教師とし、例えば、若狭丸なら「若狭丸小学校」、さんとす丸なら「さんとす村小学校」というように、船の名前を取っていました。ブラジル到着前には校長名

で修了証書まで配られていました。私が確認できた洋上小学校の最古の記録は、一九二四年のしかご丸の航海の例です。商船三井社史編纂室で見つけたらぶらた丸の船内新聞「船内ニュース」には、「らぶらた小学校が明日より開校されます」というお知らせが回覧され、尋常科一年生から高等科二年生まで一八人の児童・生徒がいたことがわかります（写真7参照）。このように、移民子弟の教育は、少な

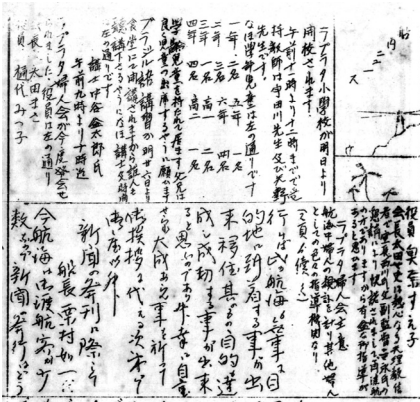


写真 7：らぶらた小学校開校を伝える「船内ニュース」の記事（1935）
商船三井社史編纂室提供

くとも大正末期に入ってから、ブラジル渡航によって断絶するのではなく、日本の出身母村の小学校から洋上小学校を経て、ブラジルの日系教育機関まで連続していたということをおわかりいただいたと思います。

以上、戦前のブラジルには、実にさまざまな日系教育機関が存在したということが理解できると思います。

3. ブラジル日系教育機関の教育活動

では、三番目に、今まで述べてきた教育機関では、どのような教育を行っていたのでしょうか。ブラジル日系教育機関の教育活動について、ここでも小学校で行われていた教育活動を中心に、科目・シラバス、教材・教授法、課外活動、日本文化の継承に分けて、お話したいと思います。

戦前期ブラジルの日系教育は、「日本と同等」であることに価値をみとめていたと言われます。日本語教育というより、「日本人」になるための教育に重きを置いていたというのは先ほど述べた通りです。ポルトガル語の習得も期待されていたので、「日本と同等」以上のことを求められていたと言うべきでしょうか。

ブラジルの日系小学校で教えられていた科目は、一九三〇年代には、ふつう、修身・読

本・綴り方・理科・唱歌・歴史・地理・算術・体操など日本の文部省規定に準ずるものでした。ただ、サンパウロのような都市部、バストスやアリアンサといった日系の国策的大移住地の小学校でこそ、これらの科目が教えられていたものの、農村部の多くの学校では常に教師不足や教材・教具の不備に悩まされていたので、これらの科目がすべて十全に機能していたわけではありませんでした。授業もばらばらな学年が一つの教室に集まって行われる複式授業がふつうでした。また、一九三三年四月にサンパウロ州において「十歳未満の者に外国語の教授を禁止」する法令^⑧が成立したために、日系の小学校でもポルトガル語教育が義務付けられるようになります。実はそれ以前から、午前中は日本人教師による日本語、午後からはブラジル人教師によるポルトガル語というふうに、意図しない形でバイリンガル教育を行っていた学校も多く、聖書やブラジルの歴史、地理が教えられていたところもありました。

では、実際どのような教科書が使われ、どのような授業が行われていたのかということですが、一九三〇年代前半までは、ポルトガル語の授業以外では、日本の国定教科書を使うのがふつうでした。一九三六年には、ブラジル最初の日本語教科書である『日本語讀本』が編纂されますが、これが発刊されるまでは（あるいは発刊されてからも）、日本の国定教科書である、『小學國語讀本』、『尋常小學修身書』などという教科書が使われていました。

二〇〇八年二月にサンパウロ州ボツカツという田舎町に調査に行った時、一人の元日系小学校の生徒だった人（故人）が所有していた数十冊の教科書を見せていただき、そのほとんどが日本の国定教科書や早稲田の講義録だったので驚きました。かなりの分量の日本の国定教科書がブラジルで使用されていたと考えられます。ただ、日本の国定教科書の内容がブラジルの国状に合わないため、一九三〇年代中頃からはブラジル・ナシヨナリズムの台頭を背景に、『日本語讀本』ほか、『ブラジル地理』『ブラジル歴史』『Minha Patria 私たちの国』といった独自教科書が日系コミュニティにおいて編纂されることになりました。では、日系子弟たちはどのような学校生活を送っていたのでしょうか。表3は、一九三〇年代に大正小学校に通ったNS氏（一九二四年台湾高雄生れ）のお話をもとに、高等科時代一九三七年頃の一週間の学校生活を表にまとめたものです。

週日の午前中は、州立カンポス・サーレス小学校でポルトガル語の授業、午後は大正小学校で日本語、週三回ほどポルトガル語という科目があったものの、ほとんどは日本語で授業を受けていたといえます。週に一度聖州義塾の剣道場に通い、たまに同塾の日曜学校に出たりしましたが、ほとんど毎日野球の練習をしていたそうです。「エースピッチャーで、三番を打っていた僕が行かないと、試合も始まりませんよ」と笑っておられました。

表 3 : NS 氏の学校生活
(大正小学校高等科時代 1937 年頃)

曜日	午前	午後	夕方以降
月	カンボス・サーレス小学校 (ポ語)	大正小学校 (日本語・一部ポルトガル語)	野球練習
火	カンボス・サーレス小学校 (ポ語)	大正小学校 (日本語・一部ポルトガル語)	野球練習
水	カンボス・サーレス小学校 (ポ語)	大正小学校 (日本語・一部ポルトガル語)	野球練習
木	カンボス・サーレス小学校 (ポ語)	大正小学校 (日本語・一部ポルトガル語)	野球練習
金	カンボス・サーレス小学校 (ポ語)	大正小学校 (日本語・一部ポルトガル語)	聖州義塾 (剣道)
土	大正小学校 (日本語・一部ポルトガル語)	野球練習・試合	
日	野球練習 (たまたま) 聖州義塾日曜学校 (日本語・ポルトガル語)	(試合前は) 野球練習	

では、実際どのようなことが教えられていたのかということですが、ブラジルの日系小学校は先にお話ししたように、地域によって差が大きく、教授法・教授内容を一般化することはむずかしいのです。ただ、一九三〇年代前半までは、教師は通常日本で教育を受けた人たちだったので、日本と同じか日本に準じた授業内容だったと考えられます。

教科書のトピックから見ると、ブラジルでもっとも使用された国語教科書『尋常小學國語讀本』巻一（一九一八）の最初の単元は「ハナ」、『小學國語讀本』巻一（一九三三）は有名な「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」で、

いずれも花に関するトピックから始まります。これがブラジル日本人教育普及会によって一九三〇年代後半に編纂された『日本語讀本』になると、多少事情が異なってきました。最初の単元が「ハナ」で、『尋常小學國語讀本』と共通していますが、挿絵には桜とともにブラジルの花イッペーが描かれています。この『日本語讀本』の教師用虎の巻である『日本語讀本教授参考書』では、この単元について次のように説明しています。すなわち、「日本に於ては、昔から花といへば櫻を思ふのが常である」としながら、「伯國に於ては、日本の櫻に相當すべきもの、即ち國花と稱すべきものはないが、それに近いものとして、ここにはイッペイを選んだのである。本課はイッペイと日本の櫻の美とを配合したもので、伯國民としての感情と日本國民としての感情が融一的に表はされてゐる」(ブラジル日本人教育普及会、一九三六、一頁)と解説されています。「日本の教育」と「ブラジルの教育」の融和が試みられていると見ることができます。

この『日本語讀本』は総単元数一九五の内、かなりの数の素材が国定教書から取られています。中には「ブラジルの発見」や「オズワルド・クルース」などブラジルの偉人の歴史上の人物の伝記が記載されています。例えば、パラグアイ戦争(二八六四〜二八七〇)の英雄「ラッパ兵ジェズース」を取り上げた単元(巻五)などはなかなか興味深いと思います。

写真 8 : 『日本語讀本』 卷一表紙と同書卷五「ラッパ兵ジェズース」



將軍の命令を受けたジェズースは、さつそくラッパを口にあてて、

進め—

吹きかけた時、たちまちとび来つた敵のたまはジェズースのうでをつらぬきました。ラッパは口をはなれました。けれどもそれはたゞちよつとの間で、

進め、進め

勇ましいひゞきは血のしたゝるうででささへたラッパから全軍につたはりました。やがてまた今一つのたまがジェズースのうでをつらぬきました。けれどもジェズースは、まだしっかりとラッパをにぎつてはなしませんでした。

これは一見ブラジルの英雄を顕彰する意図のもとに

記載されたものようですが、私たち日本人にはどこかで聞いたような内容のお話ですね。そうです。戦前の修身教科書に採録された次のような日清戦争の英雄「ラツパ卒キグチコヘイ」の物語と酷似しているわけです。

キグチコヘイハ テキノタマ ニアタリマシタガ、

シンデモラツパラクチカラ ハナシマセンデシタ。〔尋常小學修身書〕卷一 一七)

ここには、先の新国家体制における同化主義の圧力への対応とともに、日本のナショナリズムに同調するような移民一世世代への配慮という涙ぐましい努力が見られるのではないのでしょうか。また、ブラジル日系社会の側から日本語教育の生き残りをかけての同化主義への歩み寄りもあったことを示していると思われます。あるいは、「日本の教育」と「ブラジルの教育」の融和という理想のもとに、聖州義塾の小林美登利が思い描いたような一種のコスモポリタニズム、「大和魂をもったブラジル市民」創造への希求が背景にあるとも考えられるのではないのでしょうか。

次に、日系小学校の教育の特徴として重要なものに課外活動があります。主な活動として、野球・陸上・相撲・柔剣道・学芸会などが挙げられます。また、大正小学校では、校

写真9：暁星学園の学芸会（1935）イサク岸本氏提供



内新聞を発行する新聞部や園芸部の活動もあったそうです。この中でも、野球・陸上というのはブラジルでも少年スポーツの花といわれ、各地で対校試合やトーナメントが行われました。各校では、学芸会や運動会もさかんに行われていました。

ブラジルの日系教育機関の大部分を占める農村地帯の日系小学校では、何度も言いますが、日本語教育というより、「日本人」になるための教育が行われていた、あるいは期待されていたと言えます。もちろんポルトガル語の授業があったところも多く、必ずしもそうとは言いきれない点もあるのですが、少なくとも三〇年代農村部の父兄の願いとしてはそういう傾向が強かったわけです。したがって、そういった学校では、理念的には、朝礼から授業、終礼まで、すべてが日本文化の継承という目的のもとに行われていたということが言えるでしょう。中でも、

正月の元旦四方拝、二月の紀元節、天長節、明治節の四大節は、学校にとっても、各地の日系コミュニティにとっても重要な行事であったわけです。農村では、ご真影や教育勅語の奉安所をいただき、コミュニティの成員を集合せられるような空間は小学校しかなく、これらの儀礼は学校を中心に実施されました。天長節に行われていた運動会は、学芸会とともに、コミュニティをあげての重要行事であり、数少ない娯楽の一つでした。また、日系コミュニティを巡回する映画上映会がさかんでしたが、スペースの問題から、これも学校で実施されることが多かったようです。大正小学校では、三〇年代に狂言などが上演されており、一九三七年一月一二日には、同小学校を訪れたテノール歌手藤原義江によってリサイタルが行われています。これらのことから、学校というものが、一種のコミュニティセンターや村の集会所の役割を果たしていたことがわかります。その重要性は、国内の比ではないほど大きかったと思われれます^⑩。

まとめにかえて

では、今日のお話のまとめに入りたいと思います。まず、私たちが忘れてはならないのは、日本人の移民史というのはブラジルや米国など多くの国々にまたがってはいる（越境している）が、まちがいなく日本の近現代史の一部であるということです。また、ブラジ

ル近現代史の一部とも重なっています。

しかし、今日紹介した日本の教育文化のブラジルでの移植と展開というような事象を歴史的に評価するためには、従来の「日本史」の枠組みでは捉えきれなくなつてしまいます。日本には『史学雑誌』という権威ある月刊歴史学雑誌があり、毎年の第5号で「回顧と展望」という、前年に発表されたすぐれた歴史研究をいくつかのカテゴリーに分類・紹介し、批評を加えるという特集を組みます。研究ごとに、歴史理論、日本、東アジア、アフリカ、ヨーロッパとほぼ地域別に分け、さらに日本の場合は考古、古代、中世、近世、近現代と時代別に分けて紹介しています。近現代の場合、さらに総論、政治、経済、外交、美術史などに分類して論じています。残念ながら「移民史」というカテゴリーはないのですが、今年二〇一〇年第5号の「回顧と展望」では、総論の部分で、劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識』（東大出版会）の提示した問題意識が取り上げられたり、国立歴史民俗博物館で新たに作られた総合展示室「現代」の「展示・戦争と平和」が「一国主義的な視野に陥ることなく、膨張する帝国の様相を人の移動から捉える視角を説明しており、展示を見る際の示唆を与える」と評価されています（『史学雑誌』第119編第5号、二〇一〇、一四〇〜一四一頁）。つまり、移民史の持つ広い視野やダイナミズムは、歴史学の中でたいへん有効であると言えるし、日本史・日本研究の裾野と可能性を広げたいへん

有力で将来性のある分野であると言えるわけです⑩。

「移民」というものを、「ある国から他の国へ移動し、あるまとまった期間定着する人びと」と広く定義すると、私たちの身近なところにも多くの移民が存在することに気づきます。皆さんに関わるもつと身近な例でいうと、皆さんのお子さんやお孫さんが、例えば外国に留学して、その国で就職したり、その国の人と結婚してその土地で生活すると、「移民」ということになります。その国で子どもが生まれ、その国の国籍法がブラジルのような出生地主義の国だと、その国の市民権が生れるわけです。日本人が簡単に外国に出かけ、留学したり、退職者ビザで長期滞在することがふつうになった現在、私たちの周りにいる人びと、あるいは私たちは移民になる可能性はたいへん大きいわけです。こう考えると、移民というものが私たちにとって、たいへん身近なものであるということがわかります。これからますますグローバル化していくこの世界の中で、私たちは移民史というものを「我々の歴史」として再認識し、その中から教訓を引き出し、私たちの子孫に伝えていく権利と義務を担っているのではないのでしょうか。

主要参考文献

- 青柳郁太郎編（一九五三）『ブラジルに於ける日本人発展史・下巻』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会（石川友紀監修（一九九九）『日系移民資料集南米編30巻』日本図書センターに再録）
- 外務省記録「学校関係雑件」第七巻（大正五〜七年）
- カトリック教義研究会編（一九四九）『ギード神父とサン・フランシスコ学園』カトリック教義研究会
- 黒瀬郁二（二〇〇三）『東洋拓殖会社―日本帝国主義とアジア太平洋』日本経済評論社
- 小島勝（一九九九）『日本人学校の研究―異文化間教育史的考察―』玉川大学出版部
- 小島勝編著（二〇〇三）『在外子弟教育の研究』玉川大学出版部
- 小林美登利（一九三六）「聖州義塾略史」『聖州義塾々報』7号
- 坂口満宏（二〇〇四）「移民史研究の射程」『日本史研究』500号、一三一〜一五一頁
- 佐藤皓一編（一九八五）『財団法人赤間学院創立五十年史』財団法人赤間学院
- サンパウロ人文科学研究所編（一九九六）『ブラジル日本移民・日系社会史年表―半田知雄編著改訂増補版―』サンパウロ人文科学研究所
- サンパウロ日本人学校父兄会（一九三四）『在伯日本人学校一覧表』サンパウロ日本人学校

父兄会

史学会編『史学雑誌』第119編第5号笠間書院(二〇一〇年五月)

住田育法(二〇〇〇)「新指導者ヴァルガス」金七紀男・住田育法他編『ブラジル研究入門

—知られざる大国500年の軌跡—』晃洋書房、一二一―一二九頁

寺門芳雄他編(一九四一)『パ延長線教育史』。パ延長線教育史刊行委員会

日本移民80年史編纂委員会(一九九一)『ブラジル日本移民八十年史』サンパウロ、移民80

年祭典委員会

日本力行会編(一九四〇)『皇紀二千六百年記念・日本民族小学生作品集』日本力行会

沼田信一(二〇〇三)『日本人が開拓した植民地の数々』整理第7号(私家版)

根川幸男(二〇〇八 a)「大正小学校(1)」In. *Discover Nikkei*「海を渡った日本の教育」

<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2008/12/5/nihon-no-kyouiku/>

根川幸男(二〇〇八 b)「大正小学校(2)」In. *Discover Nikkei*「海を渡った日本の教育」

<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2009/1/1/nihon-no-kyouiku/>

伯刺西爾時報編(一九三三)『伯刺西爾年鑑』下巻 伯刺西爾時報社

伯刺西爾時報編『伯刺西爾時報』(一九三八年一〇月二二日)

ブラジル日本移民70年史編纂委員会(一九八〇)『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日

本文化協会

前山隆（二〇〇一）『異文化接触とアイデンティティ』御茶の水書房

みずぶ「耕地巡遊を終へて（二二）」『伯刺西爾時報』34号（一九一八年四月二六日）

森本豊富（二〇〇七）「越境する民と教育―越境者の類型と教育プログラム―」森本豊富・

ナカニシ・ドン編著『越境する民と教育―異郷に育ち地球で学ぶ―』あおでみあ書齋
院

山田廸生（一九九八）『船にみる日本人移民史―笠戸丸からクルーズ客船へ―』中央公論社

吉田亮（二〇〇五）「日本人移民の越境教育史に向けて」吉田亮編著『アメリカ日本人移民
の越境教育史』日本図書センター、三〇二五頁

輪湖俊五郎（一九二九）『パウルー管内の邦人』（石川友紀監修（一九九九）『日系移民資料
集南米編25巻』日本図書センターに再録）

ACAL (1996). *Liberdade*. ACAL

DEMATINI, Zelia de Brito Fabri & ESPÓSITO, Yara Lúcia (1989) “São Paulo no Início

do Século e Suas Escolas Diferenciadas”. In. *Ciência e Cultura: Revista da*

Sociedade Brasileira para O Progresso da Ciência. São Paulo, pp.981-995.

FAUSTO, Boris (1994) *História do Brasil*. São Paulo, Edusp.

NEGAWA, Sachio (2009) “Tipologia e Característica das Instituições Educacionais Nikkeis no Brasil do Período Pré-Guerra”. In. *Anais do ENPULLICJ 2009*. São Paulo, FFLCH/USP.

SHIBATA, Hiromi (1997) *As Escolas Japonesas Paulistas (1915-1945): Afirmção de Uma Identidade Étnica*. São Paulo, Dissertação de Mestrado da FFLCH/USP.

教科書類

『尋常小學修身書』卷一（一九一八）文部省〔海後宗臣編（一九六二）』日本教科書大系・近代編』第三卷に再録]

『尋常小學國語讀本』卷一（一九一八）文部省〔海後宗臣編（一九六三）』日本教科書大系・近代編』第七卷に再録]

『小學國語讀本』卷一（一九三三）文部省〔海後宗臣編（一九六三）』日本教科書大系・近代編』第七卷に再録]

ブラジル日本人教育普及会編（一九三六）『日本語讀本』卷一、卷五
ブラジル日本人教育普及会

ブラジル日本人教育普及会編（一九三六）『日本語讀本教授參考書』卷一
ブラジル日本人教育普及会

ブラジル日系教育史略年表

西暦	和暦	月	日	ブラジル日系教育関係事項	関連事項
1908	明41	06	18	第1回ブラジル日本移民(笠戸丸移民)、サントス到着	
1914 ～ 15?	大3 ～4			大正3～4年頃、コンデ・デ・サルゼーダス通りで田頭甚四郎(1912渡伯)が3～4人の子どもにイロハを教える。	
1915	大4	10	07	大正小学校、聖市コンデ・デ・サルゼーダス通り38番に、宮崎信造らにより創設。教師1人、生徒3人。	東京植民地・平野植民地創設
1916	大5	01		大正小学校、コンデ・デ・サルゼーダス通り51番に移り、同年48番に戻り児童10数人となる。	小林美登利(聖州義塾創立者)、同志社大学を卒業しハワイ渡航。ホノム義塾へ赴任
		05		桂小学校開校	
1917	大6			ノーバ・エスペランサ小学校、旭小学校、アダア・リンバ小学校開校	
1919	大8	01	29	大正小学校、私立公認校の認定	
1920	大9	01	23	大正小学校、後援会創立	
1921	大10	12		小林美登利、渡伯。サンパウロ「伯刺西爾時報」で宗教欄担当。マッケンジー大学でポルトガル語を専攻	
1922	大11	05	19	小林美登利、「聖市コンデ街ノ大正小学校ヲ借り英、葡両語ノ夜学ヲ開ク」	信濃海外協会発足
1924	大13	06	04	大正小学校初代校長であった宮崎信造没	
1925	大14	09	07	小林美登利、ガルヴォン・ブエノ通り85番に聖州義塾開設	
1927	昭2	12	14	在伯日本人教育会(後の在サンパウロ日本人学校父兄会)設立	信濃海外協会、第1回ブラジル教員留学募集、選考試験
1928	昭3	03		第1回外務省教員留学生(清水明雄・両角貫一ら3人)サントス到着、すぐにアリアンサに向かう	清水・両角、長野師範学校卒業
		03	18	イエズス修道会、聖フランシスコ学園をリベルダーデ通り149番に開校	
1929	昭4	02		第1回外務省教員留学生清水明雄アララクワラ師範学校、両角貫一ピンダモンニャガバー師範学校入学	海外移住組合連合会、ブラジル現地法人ブラ拓を設立
		08	09	在サンパウロ日本人学校父兄会、サン・ジョアキン通り67番に設立	
		10		大正小学校、サン・ジョアキン通りへ移転	
1931	昭6	09		エメボイ実習農場開設	満州事変勃発

1932	昭7	02	01	岸本昂一、コンソラゾン通り 547 番に暁星学園創立	
		03	03	アンナ・ワルドマン女史の経営する裁縫学校に郷原満寿恵が日本人部を設ける	
		04		日本人小学校、ブラジル国内には 187 校。未届け校も 20 校を数える	
		05	05	日伯裁縫女学校、独立し、タマンダレー通りに校舎を定める	
		05	26	聖フランシスコ学園の三階建て新校舎落成	
		12		清水明雄、カンピーナス師範学校卒業。アリアンサ第 1 小学校へ赴任	この年、在ブラジル日本人総数 132,689 人
1933	昭8	04		赤間重次・みちへ夫妻がサンパウロ市トラベッサ・サンパウロ通りに裁縫教授所を設立。同年 8 月にはコンセリエイロ・フルタード通り 18 番に移転し、サンパウロ裁縫女学院と改称	
		04	19	日伯裁縫女学校、ラヴァペス通りに移転	
		06		サンパウロ裁縫女学院創立	この年入国の日本人移民 25,800 人
1934	昭9	01	10	サンパウロ裁縫女学院、コンセリエイロ・フルタード通り 116 番に移転	
				暁星学園、新校舎および寄宿舎をピニエイロス地区のミゲル・デ・イササ通りに新築し移転	
		07	16		外国移民二分制限法（事実上の日本移民制限法）公布
		10	21	大正小学校で、学生連盟発足	
1935	昭10	04		サンパウロ裁縫女学院、校誌『學友』創刊	日本より経済使節団ブラジル来訪
				聖フランシスコ学園女子部、リベルダーデ広場 143 に開設される	
		08	01	サンパウロ裁縫女学院、サン・ジョアキン通り 216 番に移転し「サンパウロ女学院」と改称。日本語小学部開設	
1936	昭11	11		ブラジル日本人教育普及会により『日本語讀本』巻 1 および教授参考書発刊	
		12	20	サンパウロ女学院で第 1 回女学部並びに専修部の卒業式挙行	この年、ブラジルより経済使節団訪日
1937	昭12	01		暁星学園、勤労科開設	
		11	10	14 歳未満の者に外国語の教授を禁止（サンパウロ市およびサントス市は 11 歳未満）	ヴァルガス政権新国家体制確立
		11	12	大正小学校講堂にて、藤原義江の独唱会	
1938	昭13	10	21	ブラジル全土の日本人小学校 476 校	
		11	06	聖州義塾で崎山比佐衛講演会「アマゾン語る」	
		12	25	ブラジル全土の日独伊を主とした外国語学校に閉鎖命令	この年、邦字新聞日刊となる
1939				この年、プレジデンテ・ブルデンテ商業学校、プレジデンテ・ブルデンテ中学校、バストス中学校が開校	
1940	昭15	11			各地で皇紀 2600 年記念式典

1941	昭 16	04	26	サンパウロ女学院、タマンダレー通り 849 に移転	
				この年刊行の『バ延長線教育史』に「全伯六百に餘る日本語學校の存在」	太平洋戦争勃発
1942	昭 17	01	29		ブラジル、日本との国交断絶。それに伴い在外公館閉鎖
		02	02	サンパウロ市中心部からの日本人立退き命令発令。聖州義塾立ち退き。大正小学校やサンパウロ女学院に転入する日系子弟が増加	
		12	06	サンパウロ女学院創立 10 周年。突然、裁判所から即刻強制退去命令が発せられ、急遽ベルゲイロ通りへ移転	
1944	昭 19	01	08	サンパウロ女学院を告発する記事が、現地紙に掲載される。「サンパウロ市の真ん中に三百人の生徒を擁し日本精神昂揚を図る黒幕の学校がある。学務当局は怠慢だ」というもの	
		08	15	サンパウロ女学院、伯人視学官が授業を巡視中、日本語で書かれた生徒の裁縫帳を発見。禁止された日本語が校内で見つかったことにより、学校閉鎖命令	
		10	10	サンパウロ女学院、校名を「エスコラー・バルゲイロ」に改め新設校として開校	
1945	昭 20	06	06		ブラジル、日本に宣戦布告
		08	15	ポツダム宣言受諾の放送	日本、ポツダム宣言受諾。勝ち組・負け組抗争はじまる
1947	昭 22	11		新教育令施行にともない、外国語教育一部解禁	

*カトリック教義研究会編（1949）『ギード神父とサン・フランシスコ学園』カトリック教義研究会、小林美登利（1936）「聖州義塾略史」『聖州義塾々報』7、サンパウロ人文科学研究所編（1996）『ブラジル日本移民・日系社会史年表—半田知雄編著改訂増補版—』サンパウロ人文科学研究所、佐藤皓一編（1985）『財団法人赤間学院創立五十年史』財団法人赤間学院、ACAL（1996）. *Liberdade*. ACAL などとインタビューに拠り作成。

① 戦前期ブラジルの邦字新聞『伯刺西爾時報』一九三八年一月二一日付の記事には、日本人小学校四七六校と報じられている。また、寺門芳雄他（一九四一）「刊行の辞」には、「全伯六百に餘る日本語學校の存在」と記されており、これらの資料によると、太平洋戦争直前のブラジルの日本人（語）學校数は約五〇〇〜六〇〇校であったことが知られる。さらに、沼田（二〇〇三）によると、ブラジルの日系植民地（日本人移民の地域共同体）は二一三五ヶ所にもほり、どんな小さな植民地でも學校はあったとされることから、小規模な私塾的なものも含めると、実に多くの教育機關が存在したことが想像される。

② 旧植民地やハワイ・米本土を対象とする主な研究としては、小島（一九九九）、小島編（二〇〇三）、吉田編（二〇〇五）などがある。

③ 笠戸丸移民の内訳は、七八一人の契約移民（二六五家族七三三人、独身者四八人）の他、自由渡航者一二人。皇國殖民會社社長の水野龍、同社ブラジル業務代理人上塚周平も同船した（サンパウロ人文科學研究所編、一九九六、二七頁）。

④ ただし、大正小學校が私立公認校として登録されたのは一九一九年であり、一九一七年の「サンパウロ市非ブラジル系學校統計」には、まだ日系教育機關は一校も現れていない（DEMATTINI & ESPÓRITO,

1989, p. 982)。大正小学校の詳細については、根川 (二〇〇八 a)、同 (二〇〇八 b) 参照。

⑤ みずぶ (一九一八年四月二六日) は、当時コーヒー生産地帯であったサンパウロ州北西部リベロン・ブレト周辺四八ヶ所の日本人入植耕地の調査報告である。調査対象となったのは、同地域の日本人八八〇家族で、七歳から一五歳までの学齢児童総数は、四五〇に達したという。記者はこの中で、彼ら児童が「前記四百を越ゆる学齢児童中通学者僅かに四十(二十余人は伯人学校へ、十三人はサンタ、ガブリエラ耕地内に設けられし河瀬権之丞氏経営の小学校へ)に充たざる」という就学状況におかれていたことを報告、「子孫を度外視して植民の発展を期すべからず」と慨嘆している。

また、輪湖(一九三九)は、この地方の日本人移民子弟の教育状況について、以下のように述べている。「大正七年の初頭、当時私がブラジル時報の編集に携わって居た頃、自身の興味からリベロン・ブレトを中心とした邦人家族の子弟教育に関し、之が調査の爲め、四十余日を費し行脚したことがあります。即ち其頃日本人は、未だ珈琲園移民の域を脱せず、従つて多く此地方に在住して居たからであります。調査耕地は四十数ヶ所、一大家族近かったのでありますが、日本語教育などして居る所は一ヶ所も無く、而かも父兄の希望は、如何にしてブラジル語を習得せしむるかにあつたのですが、此ブラジル学校さへ大耕地を除く外は、殆んど存在しなかつたのであります。其の時の私の結論は、児童教育を中心とする以上、一日も早く土地を所有せしめて集団せしむる外上策はないと云ふ事でありました」(同、

五一〜五二頁)

⑥ 以下の史料引用に関して、一部旧字体を新字体に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。

⑦ こうしたブラジル当局者の「危機感」は日系教育機関に対するものだけでなく、イタリヤ系やドイツ系教育機関に対しても抱かれていた (SHIBATA, 1997, p. 43)。

⑧ 洋上小学校については、山田 (一九九八) に詳しい記述がある。

⑨ この時の州教育令には、「一、外国語以外の科目は総て教授すべし。二、十歳未満は年齢の如何にかゝらず、国語文盲者に外国語を教授することを禁ず。三、ポルトガル語およびブラジルの地理・歴史の教授は、監督課より指定する時間数を以て、生来のブラジル人ポルトガル人又は帰化人の有資格者により担任せらるべきこと」(青柳編、一九五三、一九九二〇〇頁) などの規定があった。

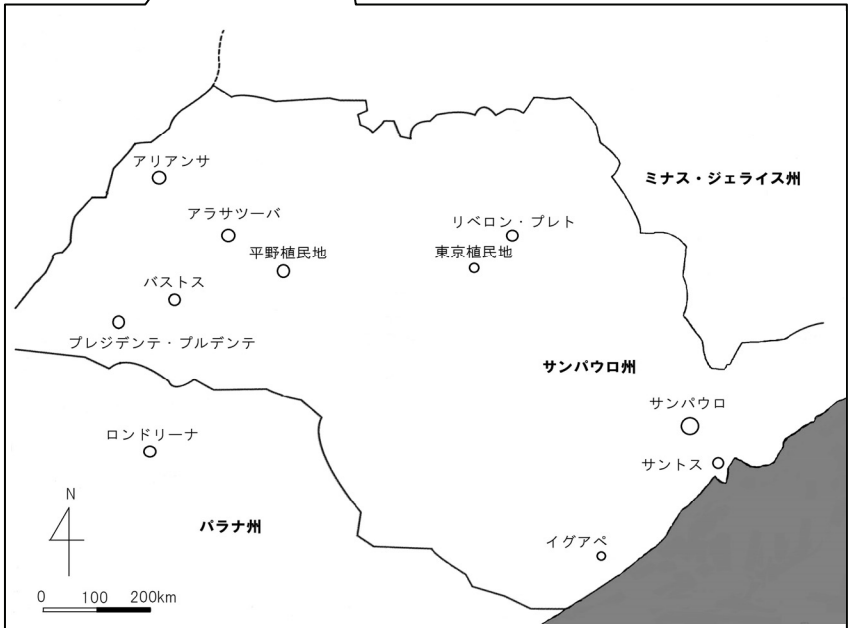
⑩ 前山 (二〇〇一) は、戦前期ブラジルの日系植民地における学校の性格を次のように抽象化して描写している。「植民地における天皇崇拜の中心は「日本学校」であった。戦後になって「日本語学校」という呼称が一般化した。戦前には「ニッポンガッコウ」と呼ばれた。(中略) 日本学校は日本人会によつて運営され、そこには必ず「御真影」が安置され、教育勅語が備えられていた。日本学校は子弟教育の場であると同時に、日本人会の集会場であり、青年団・処女会の活動の中心であり、さらには産業組合の事務所であつたりした。新年の四方拝、紀元節、入植記念祭、天長節(運動会を伴う)。戦後、メーデーの休日を抱き合わせ、またはそれに横すべりして、メーデーの日に運動会を天長節の祝祭の雰囲気(連続してきている)、卒業式などに際しては、生徒だけではなく、植民地の全員が参列して、皇居

遥拝（「東方遥拝」とも言つて、「日本遥拝」を意味した）、御真影への最敬礼、勅語奉読、君力代斉唱などの儀式が、大抵の行事に先行して行われた」（前山、二〇〇一、五五頁）。

⑩ 越境する人びとへの視点と研究の可能性については、吉田（二〇〇五）、森本（二〇〇七）を参照。日本史研究における移民史研究の射程と課題については、坂口（二〇〇四）がコンパクトにまとめている。



地図 1 : ブラジル全図



地図 2 : ブラジル東南部参考地図

発表を終えて

20代の頃、バックパックを背負って、世界のあちこちを旅しました。1992年、20代の最後にはじめてブラジルを訪れ、カルナヴァルの熱狂の中、すっかりブラジルの虜となってしまった私でした。ブラジルに住むようになったのは1996年のことでしたが、その後十数年もかの地で暮らすことになるとは想像もしていませんでした。

夢をいだいて故郷を後にし、何十日もの航海を経て異国にたどり着き、ハワイで、アメリカで、そしてブラジルで、パラレルな「近現代史」を築いてきた移民の存在と記憶は、圧倒的なものとして私たちに迫ってきます。それは日本からブラジルに渡って十数年を過ごした私個人の体験とも、すべての日本人の近現代史とも重なり、響きあっているのです。こうした驚きや感動を、日文研フォーラムを通じて、皆さんと共有し、記録にとどめることができたらと思いました。

今年、私は外国人研究員として日文研に受け入れていただきましたが、日本人である私が十数年の外国暮らしの後、「外国人」として日本に帰ってくることに面白みを感じています。千年王城の地であり、またかつて青春時代を送った懐かしく美しいこの京都で、授業や会議から解放され、ブラジルでの体験や研究を見つめ直し、新たな調査成果を加えながら再編・彫琢する機会をいただいたことは、誠に幸運なことであつたと言わねばなりません。

私の研究はまだまだ途上にあり、移民研究の持つ広い領野とダイナミズムの前で、その可能性の大きさととまどい、さまよっているというのが正直な気持ちです。ただ、ブラジルと日本との往還の中で、少しでも「移民」(=移動する人びと)と共感し、この人びとの物語を素描し、お伝えすることができるのなら、寄り道の多い私の人生も、あながち無駄ではなかったと言えるのかもしれない。そんな気持ちで、今回の訪日研究に臨んだ私でした。

外国人研究員としての任期も後わずかとなりましたが、受入れ教官としてご指導いただいた上、今回の発表ではユーモラスなコメントとともに多くの質問をおまとめいただいた井上章一先生、フォーラムの準備をしていただいた郭南燕先生、研究についてご助言をいただいた諸先生方、研究協力課の皆様にお礼を申し上げます。今後ますます日文研とブラジルの研究機関との交流が発展していくのを祈りするとともに、私自身このご縁を大切にしていきたいと思います。

また、発表と本稿の執筆に当っては、文中に引用させていただいたNS氏はじめ、ブラジルと日本の多くの方々にインタビューや資料収集でご協力をいただきました。ここには一々お名前を挙げることはできませんが、お世話になった一人一人の顔を思い出しながら、この場を借りて感謝の言葉をお贈りしたいと思います。

ありがとうございました。Muito obrigado!

根川 亨 男